

地域の生活文化を見つめ 人生を丸ごと記録する「聞き書き」

長谷川ゼミの学生が現地に赴き、聞き手として話し手と一対一で向き合い、話し手のこれまでの人生を聞き、それを話し手の言葉で文章にまとめ公表します。



学生による「聞き書き」の様子

活動の概要

目的	人々が自然とともに生きる中で育んできた有形、無形の文化、歴史、生きるための知恵、生き方を記録する
連携メンバーおよび役割	陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会…聞き書き対象者（話し手）の紹介 モンチアズール住民協会…聞き書き対象者（話し手）の紹介、ホームステイ先のアレンジ イパチンガ日伯文化協会（ANBI）…聞き書き対象者（話し手）の紹介、ホームステイ先のアレンジ トマス総合農業協同組合（CAMTA）…聞き書き対象者（話し手）の紹介、ホームステイ先のアレンジ 関西大学商学部 長谷川伸ゼミ…聞き手の現地派遣
活動地域	関西大学千里山キャンパス / 岩手県陸前高田市 / ブラジル連邦共和国サンパウロ州サンパウロ市 / ミナスジェライス州イパチンガ市 / パラ州トマスー市
活動期間	2013年4月～（継続中）

連携の経緯

- 2012年6月に陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会長による学術講演会「東日本大震災を忘れない：被災地陸前高田からの教訓」を商学部で実施。その際に、長谷川が「聞き書き」の協力を要請。
- 2012年8月に長谷川ゼミの学生が上記自治会長を始めとする被災者の方々への「聞き書き」を実施。
- 2013年度には「聞き書き」をブラジル（サンパウロ、イパチンガ、トマスー）でも実施。

解決すべき課題

- 震災による人口流出（陸前高田）
- 他地域からの訪問人口の減少（陸前高田）
- 震災記憶の風化（陸前高田）
- 日本の若者による訪問の減少（ブラジル）

大学の役割

発展途上国での夏季研修にとりくんできた「国際協力・技術移転・人材育成の現場を歩く」長谷川ゼミナールは、2011年5月から東日本大震災の被災地への支援を始めたが、その途上で「被災地の聞き書き101」に出会った。「被災された方々が日常を取り戻していく上で拠り所となるのは、『被災地』という抽象的な括りではない、ご自身が積み重ねてきた日々の営み、暮らしに溶け込んだ生活文化ではないか」（東京財団・共存の森ネットワーク（編）『被災地の聞き書きプロジェクト101』2012年、3頁）。だから「聞き書き」は一人ひとりの人生、普段の暮らしを聞く。

このプロジェクトに共感したゼミ生たちが、2012年夏に被災地で「聞き書き」を行った。その結果、話し手（被災者）と聞き手（学生）が親戚のような関係になること、聞き手（学生）にとって生き方を見直す機会となること、といった「聞き書き」の果実が見えてきた。そこで2013年度は海外研修でも「聞き書き」を行うこととし、海外研修先の一つとして私はブラジルをゼミ生に提案した。これに8名のゼミ生が呼応しブラジルの日系の方々への「聞き書き」を2013年夏に行うに至った。

なお「聞き書き」の手順は次の通りである。長谷川ゼミの学生が現地に赴き、話し手の仕事を見学したり手伝ったりするなどして信頼関係を築いた後、話し手と一対一で向き合い、話し手のこれまでの人生を聞き手（ゼミ生）が2時間程度で聞く。それを話し手の言葉で文章（6,000字前後）にまとめ、冊子やWEB上で公開する。

成果

- 2013年度『聞き書き作品』（第1版）を発行し、関係者に頒布
- 『佐藤一男聞き書き＋インタビュー記録』を発行し、関係者に頒布
- 『かがり火』第155号（2014年2月）に聞き書き作品を掲載（「住めば都になったブラジルで81年、みんなと仲良くおしゃべりしたいね」話し手：田原つやさん、聞き手：井上裕太）
- 聞き書き作品『医療は求められたところに行くのが一番いいと思って、陸前高田に来た』（話し手：吉田和子さん、聞き手：今田葵）を発行し、関係者に頒布

現場の声

・陸前高田の話し手

私は思い出つてほらずと宝物になるから、私は聞き書きとかそういうのもいいと思います。あってもいいよね。自分たちのとか、みんなのいろいろのを絵本みたいにするんでしょ？みんなね、年もいろいろだしね、やっぱりみんなの仕事とか場所も違ってるしね、年代も違うし。だからこういうことがあったとかわかるからいいと思います。自分たちで今の時代はわかってるけども薄れていくこともあるでしょ。ほんとにこうその場だけは覚えてるけど。いつまでもね自分たちでは、わかんないこともあるからね。そっちの方ではこういうこともあったのかなあと思ったりね。よその避難所でもまた違うからね。

・ブラジル・サンパウロの話し手

夢っていったら、私の人生を本にしたかったことだから、あなたたちが今日叶えてくれてるよね。これってすごくおもしろいと思わない？だって自分が夢を持っていて、それを叶えようと思うんだけど、自分で叶えられない。私は、自分の本を書きたかったんだけど、書けない。でもそれを、偶然たまたまこうやってブラジルの裏側から来た二人の女の子たちが叶えてくれてるんだよ。ありがとう。だから、私は、なんで自分の人生であなたたち二人と出会えたのかわかる。

・聞き手＝長谷川ゼミ生

聞き書きで一人の人と向き合うことで人とのつながりや感謝の気持ちを忘れないこと、自分の好きなことを続けることが大切であることを教えていただきました。

震災によって生活や環境が大きく変わってしまいましたが、前を見て強く生きているお二人に出会い、私も毎日を精一杯生きていかなければならないと強く思いました。

お二人が自分の中に住んでくれているような感覚があり、自分の私生活がうまくいかない時は立ち止まって、よく二人のお言葉を思い出します。

一緒にいた時間は決して長くはないけれど、ブラジルに帰るべき場所ができたような気がしました。

研究者の紹介



商学部 准教授
長谷川 伸
(はせがわ しん)

専門は国際技術移転論。長年ブラジルを研究対象としている。学生時代を仙台で過ごすなど東北に縁があり、3.11後は被災地支援を行っている。一般社団法人参画文化研究会理事。日本防災士機構防災士。